

日本をハンセン病から解放した薬学の大先輩

もう亡くなられましたが、私の大学薬学部の大先輩に石館盛三という先生がおられます。東京大学薬学部長、国立衛生試験所長、中央薬事審議会会長、日本薬剤師会会長等を歴任された薬学者です。

先生の業績で最も大きなものは、なんと言っても“プロミン”というハンセン病の治療薬の国産化に成功し、全国のハンセン病療養所に普及させ、ハンセン病を治療可能な疾患に変え、わが国をハンセン病から解放したことです。1996年、らい予防法という法律が廃止されましたが、実は石館守三先生がライフワークとしてハンセン病と取り組まれた、その成果によるものでした。

石館守三先生は、1901年に青森で医薬品販売会社に生まれました。子供の頃から家の手伝いで医薬品の配達などをされていたそうです。そんな折に、ハンセン病療養所にも医薬品を配達する機会があり、その悲惨な状況に幼い心を痛めていたということです。

そのような体験がきっかけとなり石館先生は、東京大学の薬学に進学、ハンセン病だけでなく、がん、結核などの治療薬の開発に取り組みました。

そして、1943年（昭和18年）、先生が取り扱っておられた結核の治療薬プロミンがハンセン病に有効であるという研究報告が米国で発表されたという情報を得ました。当時は、太平洋戦争の真最中、米国と大戦争の真っ只中でしたから、この研究報告は、中立国スイスを経てドイツへ、そしてドイツからかの有名な潜水艦、U-ボートで運ばれて日本にもたらされたのだそうです。

終戦の翌年の昭和21年、先生はプロミンの製造に成功、ハンセン病療養所を訪れて臨床試験を依頼しました。しかし、当初は誰も臨床試験に応ずる人はいませんでした。が、ただ一人、湊さんという患者さんが臨床試験に応じ、2ヶ月にわたってプロミンの注射を受け続けました。そして、失明寸前だった眼がかなり回復するなど、治療効果が発揮されたのです。この報を聞いて多くの患者がプロミンによる治療を希望したため、石館先生は、当時の厚生省を動かし、国費でプロミンを全療養所に配布する体制を作られました。

その結果、不治の病とされてきたハンセン病は治る病気になり、日本はハンセン病から解放されたのです。その後も、先生はアジアのハンセン病患者さんを救うための活動を生涯にわたって続けられました。

1996年4月、ついにらい予防法は廃止になりましたが、その3ヶ月後に95年の生涯を終えられました。先生は熱心なクリスチャンで、先生とのお別れの会に配られたメモリアルカードには、先生のにこやかな笑顔の写真と、「神に仕え、人に仕えん」という言葉がありました。

私も、がんや難病の治療薬を研究開発し、世界中の病気に悩む人々を救いたいと薬学の道を選びました。今、私は、研究者の道ではなく政治の世界に進みましたが、私の政治課題の一つとして、優れた医薬品の開発研究の推進を掲げてゆきたいと考えています。